

# 「観物興行場並遊覧所取締規則」と「観物場及遊覧所取締規則」にみる 明治・大正期の大阪近郊の遊園地施設の概念

—都市娯楽施設の史的研究—

EARLY AMUSEMENT PARKS AROUND OSAKA IN THE REGULATIONS  
FOR THE RECREATIONAL FACILITIES,  
*KANBUTSUKOGYOJO-NARABINI-YURANJO-TORISHIMARIKISOKU*  
& *KANBUTSUJO-OYOBI-YURANJO-TORISHIMARIKISOKU*  
A historical study on recreational facilities of a modern city

安野 彰\*, 篠野 志郎\*\*  
*Akira YASUNO and Shiro SASANO*

In 1882 Osaka Prefecture enacted regulations called *Kanbutsukogyojo-narabini-Yuranjo-Torishimarikisoku*, of which name was changed into *Kanbutsujo-oyobi-Yuranjo-Torishimarikisoku* at the revise after 6 years. These were issued for some kinds of recreational facilities like amusement park, pleasure gardens, exhibition space or fairground. We examined the criterion of appointing a facility as the object within the regulations. And we made the architectural image, concerned with the object, clearer, by analyzing some examples of facilities which were actually regulated. As its result, this paper especially clarified the concept of amusement park around Osaka in those days.

**Keywords:** *Amusement Park, Regulation, Osaka, Recreational Facility of a City*  
遊園地, 条例, 大阪, 都市娯楽施設

## 1. はじめに

戦前的大阪とその近郊には、東京の場合と同様に、遊園地と目される施設が数多く開発された。こうした大阪地方での開発は、東京地方よりもやや先行する傾向にあり、我が国の遊園地施設の変遷を明らかにするうえで、極めて重要な位置を占める。そして、東京と同様、大阪府でも、条例を制定して施設の取締りに当たっている。特にこうした地方で制定される条文には、行政の意図とともに施設の具体的な実情が反映されると考えられることから、当時の遊園地施設の概念を知るうえで貴重な言辞の記されていることが予想される。本稿は、そうした法的史料について検討することを通して、我が国における遊園地の概念形成の一端を明らかにするものである。

具体的には、明治前期に制定される「観物興行場並遊覧所取締規則」と「観物場及遊覧所取締規則」の両大阪府令に示される「遊覧所」について、法的概念が最も顕著に現れる定義に関する条項を主に分析する。特に、東京府において「遊園地取締規則」が制定されたのは大正15年であるから、大阪におけるこれらの規則は、我が国における遊園地の概念が形成される端緒を示すものとして重要性を持つといえる。次に、大阪府の行政史料上で分類される遊覧所について検討し、実際に取締を受けたと思われる事例と照合することで、「遊覧所」の概念について実体的な側面から明らかにする。さらに、

そうした概念を提示した当該規則と、府外を含めた大阪近郊に数多く開設された遊園地施設との関連について検討する<sup>1)</sup>。

大阪地方の遊園地施設については、橋爪紳也氏による数多くの著述によって紹介されている<sup>2)</sup>。同氏の論稿としては、新世界の形成に関するものが認められる<sup>3)</sup>。また、橋爪氏以外には、目立った研究の足跡は認められない。そして、橋爪氏は、こうしたの著述や論稿で、個別の施設についてそれぞれ言及する方式を採っている。それに対して本稿は、大阪地方における遊園地施設の特質を概念的に俯瞰して捉えようとするものである。

## 2. 条文にみる遊覧所の法的概念

前々稿で述べたように、戦前における風俗や施設に対する取締は、各府県毎に行われ、それに伴う法令も県令や府令という形で制定された<sup>4)</sup>。こうした制度の下、大阪府は、明治15年に「観物興業場並遊覧所取締規則」（以降「M15規則」と表記）を制定している<sup>5)</sup>。表1には、その後の改正の経緯を主要な改正点とともに記した。これを見るように、規則は、1回の微細な改正の後、明治21年に全面改正され、「観物場及遊覧所取締規則」（以降「M21規則」と表記）となり、以降はこの名称が引き継がれる。その後は、明治37年の全面改正（以降「M37規則」と表記）を含め、7回の改正が加えられ、戦

\* 文化女子大学 非常勤講師・博士(工学)

\*\* 東京工業大学人間環境システム専攻 助教授・工博

Lecturer of Bunka Women's University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Department of Built Environment, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

表1 観物興行場並遊覧所取締規則と観物場及遊覧所取締規則の改正の経緯

規則名称	日付	改正の規模と種類	主な改正点
観物興行場並遊覧所取締規則	M15.9.2	制定	—
	M20.11.26	小改正	飲食物販売に対する規制、集会に対する規制
観物場及遊覧所取締規則	M21.12.28	全面改正	規則名称、定義の修正、届出事項の詳細化、営業規程の改変、罰則規程の明文化
	M37.5.23	全面改正	定義の修正、届出事項の修正、営業規程の修正、防火規程の追加、罰則規程の修正
	M38.12.29	小改正	仮設期間の限定
	M43.10.22	小改正	活動写真に対する検閲
	M44.6.29	小改正	活動写真に対する取締強化、非営利的な施設を取締対象から除外
	T9.4.12	小改正	客席人口密度の限定、防火規程の強化、罰則規程の強化
	T10.1.13	大幅追加	興行内容のより詳細な届出、活動写真に対する取締の徹底強化
	S3.5.17	小改正	取締の若干の緩和

表1註：・M：明治、T：大正、S：昭和

前を通して機能した<sup>9)</sup>。規程中で、「遊覧所」とされるものが、東京における「遊園地」に相当すると思われるが、名称が異なる以上、同一の施設を示しえるかという点での検討を以下に述べる。

遊園地と呼ばれる施設は、規則の適用範囲である大阪府内だけではなく、隣県においても幾つかの候補事例が認められる。特に兵庫県では、宝塚新温泉や神戸の和楽園をはじめ、早い時期から複数の施設が継続的に営業を行っていた。兵庫県令を通覧したところ、遊覧所の名称を冠した規則を認めることができるが、ここでいう「遊覧所」とは、後述する大阪における「観物場」の概念に包含され、さしたる改正もないまま、明治44年には廃止に至っていることが確認される<sup>7)</sup>。遊園地施設の代表的な存在へと成長する宝塚新温泉は、兵庫県の統計において遊覧所として分類されておらず、劇場や浴場の規則によって取締を受けていたであろうことが推測される<sup>8)</sup>。すなわち、当時の大阪近郊における遊園地施設の概念的な側面を法的に記述しているものとして、本稿で扱った規則以外に適当なものは認められなかった。以下では、定義に見る遊覧所の概念、取締内容についてそれぞれ検討を進める。

取締対象となる施設の定義については、明治21年と明治37年において改正が行われており、ここでは、明治15年に制定された分を加えて、3種の条文について検討していく。

まず、「M15 規則」に記される「遊覧所」の定義は、第三条で、

観物興行場並ニ遊覧所ニ於テハ、左ノ諸項ヲ爲スモノトス

- 一 角力、足藝、力持、輕業、獨樂廻、曲馬、及ビ其他ノ技藝
- 二 天産ノ物品及ビ鳥獸又ハ人造ノ物品

但シ、庭園ニアル草木等ヲ觀覽ニ供スルハ此限ニ非ス<sup>9)</sup>

とあるように、具体例が提示されているのみの曖昧な規定であるとともに、観物興行場との区別もされていない<sup>10)</sup>。また、但し書きには、百花園形式の施設は該当しないことが示されている。

一方、明治21年においては、

此規則ニ於テ観物場ト稱スルハ禽獸虫魚其他ノ天産物若クハ諸細工物ヲ陳列シ又ハ相撲、足藝、力持、輕業、獨樂廻、曲馬、拳劍等の技藝ヲ演シテ公衆ノ觀覽ニ供スル興行場ヲ云フ

遊覧所ト稱スルハ園囿若クハ樓閣等ヲ設ケテ公衆ノ運動眺望等ニ供シ又ハ天然ノ地形ヲ模造シテ遊覽ニ供スル場處ヲ云フ<sup>11)</sup>

とあるように、まず、諸種の技芸を見物する場所を観物場とし、次に、垣を巡らせた園地や樓閣等を設けて運動や眺望等の娯楽に供する施設や、自然地形を模造した散策場を遊覧所と定めている。さらに、第二条においては、

名義ノ如何ヲ問ハス一家ノ寶物奇品或ハ庭園ノ草木等ヲ公衆ノ觀覽

ニ供スルモノハ観物場若シクハ遊覧所ニ屬シ此規則ヲ適用ス

というように、「M15 規則」において除外された百花園形式の施設についても遊覧所として規則が適用されることになっている。陳列物の内容や、具体的なものの記述に依る定義の方法は、「M15 規則」の場合と同様だが、ここでは、観物場と遊覧所が個別に定義されている点が注目される。「M15 規則」では、観物興行場、遊覧所ともに、諸種の陳列物や技芸が行なわれる場所として、同様に扱われたが、「M21 規則」においては、特別な構築物が設けられ、運動や眺望といった鑑賞以外の娯楽が提供される場所を「遊覧所」としている。ただし、第二条の規定で、宝物奇品の観覧も遊覧所の娯楽の要素として扱われうるとしている点には、観物場と遊覧所の概念的な共通性を指摘できる。ここで、示される遊覧所の定義は、「園囿」、「樓閣」、「天然ノ地形ヲ模造」したもの、「寶物奇品或ハ庭園ノ草木等ヲ公衆ノ觀覽ニ供スルモノ」、というように具体的な例示が幾つかあるものの、実体的な形式において客観的な基準を持ちえる確定的なものではない。文字通り、遊覧という娯楽の行為が主たる営業行為として成立するような、様々な具体例が列挙されていると捉えるのが的確だろう。

次に「M37 規則」では、

本則ニ於テ観物場ト稱スルハ動植物、鉱物類、美術其ノ他ノ工作物ヲ陳列シ又ハ劇場及寄席ノ興行種類ニ屬セサル技藝ヲ演シテ公衆ノ觀覽ニ供スル興行場又遊覧所ト稱スルハ樓閣庭園等ヲ設ケ公衆ノ觀望運動等ニ供スル場所ヲ謂フ<sup>12)</sup>

というように、記述が簡略化されたが、記述の方法や内容は明治21年のものと同様といえる。遊覧所については、「樓閣庭園等」、「觀望運動等」というように事例の提示による定義である点も変わらない。そして、施設の実体的な形式については、「樓閣庭園等」と一括りにされた分、「M21 規則」のものよりも、さらに曖昧な規定となったと捉えることができる。

また、この後にも継続する度重なる改正にも関わらず<sup>13)</sup>、名称の異なる施設類型が同じ規程によって規制され続けた事実は着目すべきである。したがって、これら2種の施設は、明治15年当時に見做されたように雑多な芸能の行われる場所としての関りが継続して認識されていたと考えることができよう。すなわち、遊覧所と観物場の境界には、ある程度の曖昧さが残されていたと考えられる。これまで見てきた定義改変の経緯を考慮するなら、遊覧所は、瑣末な見世物などを見物する施設のなかでも、観望や運動等の新種の娯楽が加わって複合化することで、観物場に比して特化した施設として差異づけられていったと見るべきであろう。

規則の取締内容は、概ね設置規程と営業規程に分類される。以下それぞれについて見ていくことにする。

#### 設置規程

「M15 規則」では、「観物興業場並遊覧所」の開設に際し、周囲の地主と家主の承諾、それと、免許地社寺境内の場合は主管者の奥印が必要とされている。これについては、別史料に、届け出書類の書式が記されており、前記以外にも、場所、種類、見料が項目にある。「M21 規則」では、これに加えて、周囲の住民の承諾とともに施設の構造仕様書が届出に必要な書類として挙げられている。また、規模や形式等において多岐にわたる施設に対応するための条項が設けられている。すなわち、観物場が仮設営業を行う場合、他人の家屋庭園を賃借して利用する場合、公益的な目的で開設する場合等のそれぞれに対して、設置の際に必要な手続きが記されており、この頃の出納が、末梢の小規模な興行にまで及んでいたことを窺わせる。さらに、新設の時に限らず、改修時や廃止時においても、報告を義務づけ、開設後の施設改変も警察の監視下に置かれることになった。「M37 規則」では、位置、規模、配置図、周辺図、建築物の諸図面と仕様書、落成期日、施設の定員、遊覧料（遊覧所の場合）等を届け出るとともに、施設の工事に当っては、基礎の打設から竣工まで4度の検査を受けることが義務づけられ、取り締まりが一層強化された様子を窺える。また、「M21 規則」では、仮設の施設は、観物場への言及に限られていたが、「M37 規則」では、仮設の遊覧所を想定していることが明記されている<sup>14)</sup>。そして、仮設遊覧所の一形式として小屋を掛ける場合が別記されていることから、仮設遊覧所自体が、一つの見世物小屋のように位置付けられることが示唆される。なお、以降の改正においては、設置規程について目立った修正を認められない。

#### 営業規程

「M15 規則」では、禁止事項として、事実とそぐわない内容を宣伝すること、猥褻物、悪臭を発する腐敗物、身体的な障害者そのものを見世物として興行すること、執拗に出費を勧めること、が挙げられている。また、営業時間は日出から日没までとされていた。「M21 規則」では、営業時間の延長が認められるが、禁止事項として、「風俗安寧若クハ健康ヲ害スヘキモノ」という文言が加わったうえ、これに違反した場合には、営業あるいは興行を中止することのある場合が明記されている。また、必要な料金の提示や施設の定員を、観客や遊客に判る場所に掲示することが義務づけられ、運営の明瞭化が促された。そして、罰則に関しても、条文と処罰方法との対応が具体的に記されるに至っている。「M37 規則」では、こうした内容に加え、定員以上の収容、客席を五分間以上暗くすること、客に対する諸種の妨害行為等、混乱や争議を招くような具体的な行為についても項目に加えられている。さらに、許可以外の事項を演じることという項目もあって、演目内容についても取締対象として予め検閲の対象とされていたことを窺わせる。こうした規定には、特に観物場と遊覧所の区別はされていないことが多く、2種の施設がはっきりと分離されたうえで扱われていない側面を示している。また、「M37 規則」では、防火規程が加えられ、罰則規程では、風俗・衛生についての不備に対する営業停止や禁止、さらには施設改修や職員の解雇が課せられる内容が加わっている。表1を見るように、これ以降は、活動写真という特定の娯楽に対する改正が大勢を

占める。これは主に観物場の領域に関する内容であるが、特に大正10年においては、説明者の管理やフィルムの検閲まで、幅広い項目に亘って、対策が講じられた。

こうした条文の内容を見る限り、「遊覧所」とは、雑多な芸能を行う場所としての性格を維持しつつ、施設の実体的な形式を確定しないなど、そこで構成される娯楽要素の内容によって分類された概念であったと捉えることができる。これは、大正末に東京で制定される「遊園地取締規則」での定義が、「区域」や「周囲の障壁」などの言葉が示すような、最初に施設の外郭を規定した概念であるのとは異なるといえよう<sup>15)</sup>。

#### 3. 行政史料にみる遊覧所の実例

実際に遊覧所として取締を受けた施設は、取締事例を示す記事などに認められる。また、遊覧所という分類は、大阪府の税制や統計調査においても共通して認められ、これに関連する史料からも、幾つかの具体的な遊覧所を推定することができる。

まず、明治21年に開設された有宝地に対して、難波署より「M15 規則」に背くとの通達があったという記事が認められる<sup>16)</sup>。同じ記事によれば、図1に示す有宝地は、現在の南海難波駅の至近に開設され、眺望閣という高樓を設けて、眺望を売り物にした。このほか、「借馬、滋真、料理、大弓、楊弓」といった娯楽を提供し、夜間には花火や河内踊りを催すなどして、賑わいを見せていたとある。こうした営業形態から、当時は日没までとされた営業時間の規定に抵触

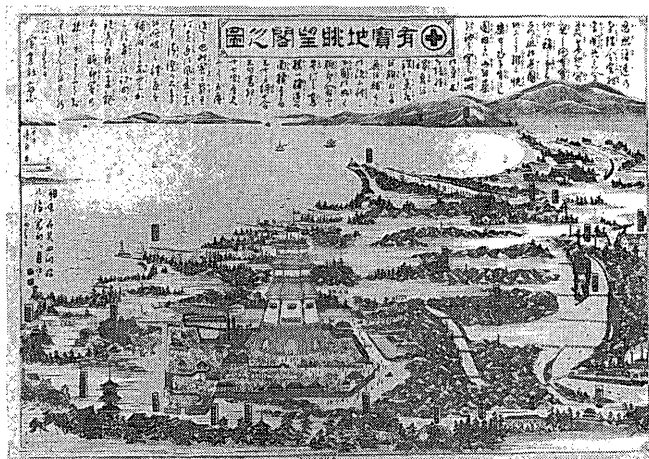


図1 有宝地眺望閣之圖（大阪城天守閣蔵）

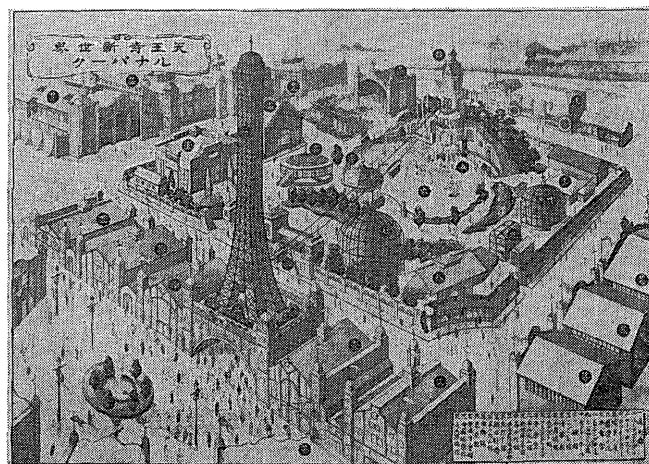


図2 通天閣とルナパーク（大阪市立博物館蔵）

したと考えられる。施設の様子を見る限り、直後に制定された「M21 規則」が示す遊覧所の定義に契合するものといえよう。このことから、このような施設の出現が、「M21 規則」への改正を促したとも考えられる。これに類する施設は、その直後に数多く開設されている。有宝地以外に、何れも明治 22 年開設の北野有楽園及び生国魂神社の浪速富士、今宮商業倶楽部などが挙げられる<sup>17)</sup>。

大阪府が各種業者に対して課していた営業税に関する史料にも、幾つかの遊覧所を確認できる。大正 13 年時点の府令では、特別に高額を納付させる遊覧所として、ルナパーク、楽天地、菊人形又は菖蒲園として使用する場合は国技館が、具体的に挙げられている<sup>18)</sup>。同じ大阪府という組織によってなされた分類である以上、遊覧所とされる個々の事例については、取締対象とされたものに相違なかったと考えられる。このうち、図 2 のルナパークは、新世界の一面に設けられた、米国の遊園地を参考にした施設である<sup>19)</sup>。周囲に障壁を巡らして、庭園や新奇性に富む諸種の娯楽設備が配置された。中央には、高樓としてホワイトタワーが配置された。また、楽天地は、大正 3 年に千日前に開設された娯楽施設で、人形陳列所、複数の劇場や活動写真室、庭園、動物舎、メリーゴーラウンドをはじめとする遊戯機械等をひとつの建物に包含した大複合建築物と見做せる<sup>20)</sup>。そして、季節的に開催される国技館の菊人形や菖蒲園を遊覧所とする点は、仮設的な催しも含みえる規則の規定内容を具体的に示す好例と捉えられる。

さらに、規則に従って実際に取締に当たっていた大阪府警察が毎年発行していた統計には、犯罪件数などのほか、取締対象となる施設の数が記録されている<sup>21)</sup>。したがって、この統計の分類には、遊覧所の項目も設けられている。記録を纏めたものが表 2 である。明治 32 年までは、大阪市、摂津、堺、和泉、河内といった地域ごとに集計されたが、明治 34 年からは、警察所轄ごとによる集計となっている<sup>22)</sup>。常設の事例の場合、一定の地域や所轄を通して継続的に記録されることになるが、明治 32 年までは、そうした傾向は無い。大阪府警の取締がどれほど定義に則して行われたか疑わしいが、明治 26 年に 35 件の施設が忽然と現れ、翌年には 6 件に減じている記録を見る限り、恒久的な常設の事例だけではなく、仮設的な興行等も多く含んでいた様子を窺える。このように、にわかに施設が増減する箇所は、その後も幾度か認められる。それでも、大正以降は、少数が継続的に記録されていく傾向にある。特に、大正末からは、記録される施設数の変動が殆ど見られなくなる。このことは、遊覧所の概念が、ある程度、規模を持った恒久的な施設へ、また興行や催事についても恒例且つ一定の規模のものへと次第に限定されていく様子を示していると捉えられよう。

表 2 について具体的に検討すると、明治 34 年から明治 42 年まで、曾根崎署に記録されているのは、立地から推測して、前記した北野有楽園と考えられる。また、大正 2 年から、難波署と戎署に跨がって記録されている 2 例がある。この所轄内では、明治 45 年に新世界ルナパークが完成し、大正 14 年に閉園している<sup>23)</sup>。ルナパークは、前述のように遊覧所とされていた。また、新世界の象徴であった通

表 2 大阪府警察統計における遊覧所の記録 (左: 明治 15 年～33 年、右: 明治 34 年～昭和 17 年)

年	地域					合計	所轄町																	合計		
	大坂市	摂津七郎	堺市	和泉	河内		瀬田	九條	市岡	天王寺	口波	戎	南	東	曾根崎	北	西船場	十三船	住吉	半野郎	口	堺	富田林		池田	枚方
M15			1			1									1					1						6
M16	4					4									1	1										4
M17	4					4									1	1				2	1	1		1		9
M18			3			3				1					1	1										7
M19			3			3				2					1	1				2	1	1				6
M20	7					7				2					1	1				2						7
M21						0				1					1				3	2				1		9
M22						0				1					1				3	2						7
M23						0				1					1				3	2						8
M24		4		2		6				1					1				3	2			1			9
M25		8		2		10				1					1				3	2						8
M26	32	1			2	35									1				3	2						14
M27	4	2				6											6		3	3						14
M28						7																				7
M29						9			2						1				5			1				11
M30						5						1			1				1			1				6
M31	4					4									1				1			1				6
M32	5					5									1				1			1				6
M33						6																				6
M34																										6
M35																										4
M36																										9
M37																										7
M38																										6
M39																										7
M40																										9
M41																										8
M42																										9
M43																										14
M44																										6
M45																										8
T2																										5
T3																										11
T4																										6
T5																										6
T6																										6
T7																										6
T8																										6
T9																										6
T10																										4
T11																										4
T12																										3
T13																										4
T14																										7
T15																										1
S2																										6
S3																										6
S4																										6
S5																										6
S6																										5
S7																										5
S8																										5
S9																										5
S10																										5
S11																										5
S12																										4
S13																										4
S14																										3
S15																										4
S16																										1
S17																										1

表 2 註: M: 明治, T: 大正, S: 昭和。網かけ部分は史料の欠落を示す。明治 33 年以前は、地域毎の記録のため表を分離した。遊覧所の記録が 0 の所轄口は記載していない。表中矢印は所轄口の統廃合による管轄の移動を示す(推定)。南口は大正 8 年より島之内口

天閣(図 2)は、大原社会問題研究所による娯楽施設の調査史料に遊覧所と分類されていることから、ルナパークと同じ所轄で記録されたことはほぼ間違いない<sup>24)</sup>。さらに、南署に記録されるのは楽天地であろうし、それぞれ立地と開設時期から、築港署では安治川遊園地、市岡署では市岡パラダイス、枚方署では枚方遊園地を遊覧所として取り締まったものと推定される。

これら具体的に推定される遊覧所は、全て民営で、諸種の娯楽設備を複合している。そして、多くの施設は、一定の広さの敷地を持ち、その中に、設備や建築物の配置をしている。有宝地、有楽園、ルナパークでは、敷地周囲に障壁を持つ形式であることが明らかである<sup>25)</sup>。安治川遊園地や枚方遊園地では定かでないが、市岡パラダイスにおいては、周囲の障壁は地図上に確認される<sup>26)</sup>。こうした具体例の構成や体裁は、後に東京で想定された「遊園地」の形式に符号することが確認される<sup>27)</sup>。すなわち、「遊覧所」は、東京での形式と重なる部分が少なくない。しかし、同じく遊覧所とされた楽天地や通天閣などは、複合建築物として捉えられ、遊歩するべき敷地の前提を窺わせる東京での想定に含みえない部分と考えられる。

ただし、統計に記録された遊覧所の中には、具体的にどのような施設を指示しているのか不明なものも多い。さらに、ここで推定された遊覧所と同様の構成と体裁を持ち合わせながら、遊覧所として記録されない事例も少なくない<sup>28)</sup>。例えば、吹田に開設された千里山花壇は、明らかに遊覧所と言えそうな体裁であることが図面を通じて判断されるが<sup>29)</sup>、吹田署ではこれについて記録した様子が認められないし、枚方遊園は、明治末から菊人形の会場であったにも関





図3 明治44年当時の香櫛園

園地が併設されている様子も認められ、複雑な構成形式を持っていたことが判る<sup>39)</sup>。さらに、初期の宝塚新温泉は、少なくとも開業数年の間は、周囲に障壁のない敷地を通り抜け可能な状態であったと推測され、これが次第に周囲に障壁を持つ施設へと変化したと見做せる<sup>40)</sup>。管見ではあるが、一経営者が開発する複合娯楽施設に限定すると、こうした極めて開かれた空間形式を持つ事例を当時の東京近郊には認めることができない<sup>41)</sup>。これらの施設は、大阪地方において特徴的な構成形式であると位置づけることができよう<sup>42)</sup>。

また、大正末から昭和初頭にかけては、東京での定義に従うような構成の「遊園地」が目立つようになっている。しかし、調べたかぎりではあるが、この時期の施設では、高樓の存在は認められない。また、表3に示すように入場料を徴収しない施設が多くなり、明治20年代のあり方とは異なる部分を見せている。すなわち、開設時期によって分類された3期には、構成形式においてそれぞれの傾向を見いだすことができる。

一方、主要な規則改正は、こうした3期の移り変わりが起こる少し前に行われる傾向にある。明治21年の改正は、前節で紹介した記事の内容等から推測して有宝地の開設が契機であろうが、その後に行われる改正は、ここで採り上げた施設の開設や、開設の計画によって直接的に促されたものとは考えにくいといえる。ここで改正を促した事実を証明するだけの事例を示すことはできないが、明治37年の改正は仮設遊覧所に関するものであり、大正10年の大幅な条項の追加は主に活動写真に関するものであった<sup>43)</sup>。何れも、ここで挙げたような常設で比較的に規模の大きい遊園地施設ではなく、簡易に現出しえる小規模な興行や施設に対応するものである。すなわち、前記のように「遊園地」において構成上の変化があったが、まず、それに先行する娯楽要素の変化に対処するために規則の改正がなされたと捉えられる。また、「遊園地」全般の実体的な構成の変化にも関わらず、明治21年に具体例を参照して規定された遊覧所の定義がそれ以降目立って改変されなかったことから、規定自体が汎用性の高いものであったことを再度指摘できる。

## 5. 結論

以上、「観物興行場並遊覧所取締規則」と「観物場及遊覧所取締規則」における遊覧所の概念的な側面について、条文、事例、大阪近郊の「遊園地」の開設状況などから検討してきた。

条例の変遷や条文の内容から、「遊覧所」が、その名称が示す通り、遊覧という娯楽の行為を主眼に置いた概念であったことが明らかになった。また、見世物その他の興行などの娯楽場を構成する要素を前提とするところから導かれたものであると捉えることができた。こうした概念は、境界を有する敷地という、施設の外郭を前提とした東京で規定された概念とは微妙に異なる側面を持つと評価できよう。

そして、実際に取締の対象とされた「遊覧所」は、東京で想定された形式と重なる部分の少なくないことを、他史料に記録された具体例から示すことができたが、同時に両地方間の差異も実例によって確認された。一方で、大阪府警が実際に取締対象の選定に用いた基準は、厳密性に欠ける曖昧なものであったと判定せざるをえない。

最後に、遊覧所とされる代表的な施設群と考えられる複合的な娯楽施設としての遊園地施設について、府外を含めた大阪近郊で概観した。その結果、建築的な構成において特徴的な施設が府外を含めて、明治末から大正期に展開された傾向が明らかになった。また、規則の改正は、常設遊園地施設の開設にやや先行する傾向にあって、それと直接関係するものではないことと、遊覧所の定義の汎用性が再確認された。

## 謝辞

本稿を纏めるに当たって、貴重な資料を提供してくださった、阪急学園池田文庫、近鉄資料室、大阪市立博物館、大阪城天守閣、箕面市郷土資料館、河内長野市郷土資料館、宝塚市立図書館市史資料室の皆様には、誌面を借りて厚く御礼申し上げます。

## 註：

- 1) 前稿までに検討した、東京警視庁が「遊園地取締規則」で定義した「遊園地」に対して、本稿第4節で扱う具体例は、「遊園地」として区別される。本稿中の遊園地あるいは遊園地施設は、上記の「遊園地」や「遊園地」の両者を包摂する語として用いている。なお本稿中では、厳密ではないが、語の指示する対象が具体的な施設であるか否かで、遊園地施設と遊園地という語の使い分けをしている。
- 2) 橋爪紳也氏による著作は、『倶楽部と日本人』学芸出版社 平成元年、『海遊都市』白地社 平成4年、『明治の迷宮都市』平凡社 平成2年、『近代日本の空間プランナーたち』長谷工総合研究所 平成7年、『大阪モダン』NTT出版 平成8年、『なにわの新名所』東方出版 平成9年等を挙げられる。
- 3) 橋爪紳也「明治45年・新世界地区開発構想について—近代大阪における娯楽地区の開発と展開—」S62日本建築学会学術講演 pp.315-316
- 4) 拙稿、安野彰、篠野志郎「「遊園地取締規則」にみる明治・大正期における東京近郊の遊園地の概念」日本建築学会計画系論文報告集 第506号 pp.161-167 平成10年4月
- 5) 大阪府府史編集室編『大阪府布令集3 自明治十三年至明治十六年』大阪府 昭和46年3月20日 pp.483-484、『大阪府警察全書』大阪府警察本署 明治17年10月 pp.654-658
- 6) 『大阪府警務規程續編』明治21年1月 pp.189-188
- 7) 「興行場並二遊覧所取締規則」兵庫県布達甲第貳拾五號 明治19年2月では、「興行場二於テ爲スモノハ角力足藝輕業曲馬獨樂廻シカ持及ヒ其他ノ技藝又遊覧所二於テ爲スモノハ天産及ヒ人造ノ物品魚鳥獸又ハ奇品古書畫ノ類トス」とされている。明治22年に微細な改正を経て、明治44年には、「興行場取締規則」の制定に伴い廃止されている。Cf. 府令第59號『兵庫県公報』第40號 明治23年8月16日、府令第42號『兵庫県公報』號外 明治44年12月30日
- 8) 兵庫県統計書によれば、宝塚の項目には、大正5年に、遊技場2、鉦泉浴場3、浴場4、劇場0、遊覧場0、寄席1、大正15年に、遊技場2、鉦泉浴場3、浴場5、劇場3、遊覧場0、寄席1が記録されている。
- 9) 「観物興業場並遊覧所取締規則」第三條 前掲、大阪府府史編集室 pp.483-484
- 10) 遊覧所には明治10年頃に流行した迷園などが含まれたものと思われる。



- Cf. 石井研堂『明治事物起源』春陽堂 昭和19年（明治40年初版）、橋爪紳也『明治の迷宮都市』平凡社 平成2年
- 11) 『観物場及遊覧所取締規則』第一條、前掲、『大阪府公報』第131號
  - 12) 『大阪府公報』第1984號 明治37年5月23日 pp.1-8
  - 13) 明治37年以降の改正については、『大阪府公報』第1984號 明治37年5月23日 pp.1-8、『大阪府公報』號外 明治38年12月29日 p.1、『大阪府公報』號外 明治43年10月22日、『大阪府公報』第2690號 明治44年6月29日 pp.2-3、『大阪府公報』第741號 大正9年4月12日 pp.2-3、『大阪府公報』第813號 大正10年1月13日 pp.6-12、『大阪府公報』第137號 昭和3年5月17日 p.1、『大阪府公報』號外 昭和13年1月12日 p.1を参照している。
  - 14) 『大阪府公報』第1984號 明治37年5月23日 pp.1-8
  - 15) 前掲、拙稿：大正15年に東京警視庁が制定した「遊園地取締規則」では、「遊園地」を「区域ヲ定メテ公衆ノ遊歩觀覽ニ供スル場所」とした。また、「遊園地取締規則執行心得」には、周囲に障壁やそれに類する境界を設けないものは取締対象とし、としている。逆に、周囲に境界を持つ施設を取締対象としていたことが解る。これらの条文中、「区域」や「周囲」という言葉からは、警視庁側が、「遊園地」を、遊歩するべき一定の敷地を前提としていた様子が窺われる。また、重田忠保『風俗警察の理論と実際』南郊社 昭和9年 においても、取締対象の基準を議論する箇所、同様の概念が通底していた様子が窺われる。
  - 16) 大阪毎日新聞 明治21年8月15日
  - 17) 『新修大阪市史 第5巻』平成3年 pp.871-872 また、この辺りは、橋爪紳也『倶楽部と日本人』学芸出版社 平成元年 に詳しい。
  - 18) 『現行大阪府令規全集』帝国地方行政学会 大正13年（追録昭和3年6月10日現在）p.207
  - 『大阪府公報』第729號 大正9年3月1日 pp.12-14
  - 19) Cf. 徳尾野有成『新世界興隆史』有田薫 昭和9年他
  - 20) Cf. 『大阪府写真帳』大阪府 大正3年、大阪毎日新聞 大正2年7月6日 p.11他
  - 21) 『大阪府警察統計』大阪府警察部 ：本稿では、大阪府公文書館と大阪市立図書館に所蔵される史料を用いている。全ての年度を網羅することはできなかったものの、「観物興行場並遊覧所取締規則」の制定された明治15年から昭和17年までの経過を知ることができた。
  - 22) 明治33年の史料は無い。明治33年の項目は便宜的に左の表に設けた。
  - 23) 前掲、徳尾野有成 p.89 には、大正8年、新世界が難波署から戎署に移管されたとある。
  - 24) 大林栄嗣『民衆娯楽の実験研究』大原社会問題研究所 大正11年 pp.108-109 では、新世界地域の調査を行っており、通天閣の分類をルナパークとともに遊覧所としている。
  - 25) 『有實地眺望閣之圖』明治21年（大阪城天守閣蔵）、橋爪京二筆『北の九階』（大阪城天守閣蔵）
  - 26) 大日本帝國陸地測量部 一万分一地形圖大阪近傍十五號（共二十一面）大阪西南部 昭和7年
  - 27) 前掲、拙稿
  - 28) 千里山花壇、香里園、初期の枚方遊園、淡輪遊園、箕面動物園などは、府内に開設されたが、遊覧所として所轄署の記録にない。
  - 29) 椎原兵市「千里山遊園地の改修設計」『庭園と風景』第9巻第5号 昭和2年5月 pp.18-21、戸野琢磨『総合造園体系第十一篇 最新造園法』誠文堂 昭和6年 pp.306-307
  - 30) 枚方遊園は、明治45年、菊人形展の開場として整備された。開園前の新聞記事を見ると、鉱泉浴場、水泳浴場、電気浴場、飛瀑などが工事中である様子が報じられている。Cf. 『京阪70年のあゆみ』京阪電気鉄道株式会社 昭和55年、『朝日新聞記事集成 第4集』枚方市史編纂委員会 枚方市平成3年 p.114（記事は、大正元年8月9日のもの）
  - 31) ここでは、常設で且つ大型の施設であるという条件を、規模の数値が不明な場合が多いことなどによる選定の作業上の理由から、これを諸種の娯楽設備が複合されている事を以て置き換えている。実際に、ここで示された施設は、そのことによって大型施設たりえている。
  - 32) ここで大阪近郊としているのは、大阪府内外を問わない。大阪府内あるいは市内の施設についても当時の市街化状況を考慮すれば、大阪都心から近郊と見做せる位置に立地したと捉えられる。
  - 33) 遊覧所の定義は、例えば明治37年では「樓閣庭園等ヲ設ケ公衆ノ觀望運動等ニ供スル場所」とされていたが、本文でも示したように明確な選定基準があるわけではなく、取締対象となりえる施設の範囲は広範と考えられる。したがって、ここで規定した遊園地施設も、府外の施設であることを除けば、この範囲に含まれるものと考えられる。
  - 34) <遊園地>の語については註1)を参照。事例の選定にあたっては、各種観光案内のほか「六大都市郊外電鉄の遊園地経営」『都市公論』第14巻第8号 昭和6年8月、社史、市史、区史等を参考にしている。また、博覧会での興行については、開催期間のみを特化させてしまうため、採取を見送った。また、単一娯楽の興行であるパノラマ館は、ここでの分析対象とはしていない。
  - 35) 前掲、拙稿
  - 36) 田村剛「将来の遊園地に対する希望」『庭園』第3巻第5号 大正10年5月 p.1においても、「殊に近年郊外電車や自動車の発達につれて、夫等、遊園地は電車又は自動車の会社や土地会社などと連絡を計って、愈郊外に向かつて移動しつつある譯である。蓋し遊園地の経営は多くの場合に於て独立経済は立たぬものと考えられてゐる。然し遊園地が遊覧客を誘致することは交通機関の収入を増すことであり、又遊園地が界限の商店や住宅の発展を来すことは附近地主に対して土地の自然増価を計る所以であるから、遊園地の経営は直接間接土地電車等の営利を目的としてゐない場合は少ない。」と当時の遊園地施設が郊外に延伸する鉄道と強く結びついていたことが述べられている。
  - 37) 「須磨寺境内全図」大正13年（上野山福祥寺『須磨寺 歴史と文学』ジュンク堂書店 昭和62年に所収）
  - 38) 大久保透『最近の大阪市及其附近』大久保透 明治44年 pp.494-497 香櫨園は、香野蔵治と榎山慶次郎が開設し、阪神電鉄が経営に参画した。
  - 39) 大日本帝國陸地測量部 二万分一地形圖大阪近傍二十五號（共二十八面）甲山 明治44年
  - 40) 『阪神急行電鉄二十五年史』阪神急行電鉄株式会社 昭和7年、『京阪神急行電鉄五十年史』京阪神急行電鉄株式会社 昭和34年 を用いているが、『山容水態』箕面有馬電気軌道株式会社 大正2年7月～大正5年6月 や、藤井忠徳『宝塚案内誌』たから新聞社 大正2年、松田壮志郎『宝塚沿線名勝誌』松田壮志郎 大正9年、『梅田より神戸箕面宝塚へ』阪神急行電鉄 大正10年 等の案内誌の記述も参考にしている。
  - 41) 浅草六区に単独で設置される観覧車、パノラマ館、愛宕塔、十二階、昆虫館など、遊覧所として位置付けえる事例は東京でも散見される。このうち、十二階と昆虫館は、複合娯楽建築として楽天地や通天閣などと同じように扱っているが、「遊園地取締規則」の定義では想定されていない形式といえる。複合の度合いと規模においては大阪の事例に及ばない。また、前々稿では、「遊園地取締規則」の定義に従って「遊園地」を選定し、本稿における遊園地施設よりも狭い範囲の事例を扱ったが、実際に史料を見ていく過程でも、大阪のような開放的な事例は認められなかった。
  - 42) こうした内容については、開発者側の意図等についても検討するべきではあるが、そのことを示す適当な史料は今のところ認められない。
  - 43) 明治37年の改正は、前年に開催された第五回内国勸業博覧会の影響も考えられる。同博覧会には、メリーゴーランドやウォーターシュートなどの遊戯機械をはじめ、新種の娯楽設備が設置されており、新たな遊覧所のあり方を示唆した結果、規則の改正を促した可能性は否めない。また、パノラマ館などは、博覧会の催しに直接関係するもの以外にも、複数が大阪の市街に設置されている。

（1999年12月10日原稿受理，2000年5月12日採用決定）